

# 人間を成長させる力 — ボランティア

学長 鵜殿博喜

## 1. 明治学院大学におけるボランティア活動の広がり

明治学院大学のボランティアセンターは、阪神・淡路大震災のあと、震災の被災地でボランティア活動をおこなった学生たちの要望を受けて、まず横浜校舎で発足し、その後2000年代に入って文科省の特色ある教育プログラムに選定されて大きく飛躍した。2000年代の半ばには、当時の大塩武学長のもとでボランティアセンターはさらに飛躍をとげ、横浜校舎のボランティアセンターも事務室の場所が学生の出入りしやすいところに移された。

人も大学もなにがきっかけになって思わぬ方向に歩みを進めるかわからない。私自身、ボランティアといえば困っている人を助けることくらいにしか思っていなかった。これが大学の特色になるとは考えてもみなかった。しかし、副学長時代、文科省のプログラムに応募するさいの責任者になったり、ソニーマーケティング社の「学生ボランティアファンド」（事務局は本学ボランティアセンター）の審査員になったりして、全国の大学のボランティア活動の内容を知るにいたって、ボランティアに対する認識は一変した。ボランティア活動とはボランティアな精神でおこなう活動であるが、その範囲は、支援、救護、援助などにとどまらず、町起こし、町づくりなどの地域活性化のための活動から国際的な問題解決のための活動、企業の社会貢献への参加まで、じつに多様多彩な活動を包摂する。

大学での生活とは、講義を聴き、書を読み、課外活動をし、キャンパス内で学生同士が交流することが重要であり中心であることは言うまでもないが、ボランティア活動は一種の社会活動であり、社会に深くかかわる活動という点で、日常的なキャンパス内での活動とは異なる。もちろん学内にも同世代の学生同士の助け合いのなかにボランティア精神が生きているが、多くの場合ボランティア活動は社会のなかでおこなわれる。社会のなかでおこなわれるということは、必然的にさまざまな世代の人々と関わるということである。学習支援ならば年少の子供たちと、町起こしならば若者から老齢の住民たちと、活動が世界に広がれば異文化異言語の人たちと、いずれにしてもキャンパス内では経験できない経験をそれぞれの場ですることになる。

## 2. 3. 11後のボランティア活動

人間世界にはなにが起るかかわからない。日々の報道を見ていると、私たちが平穏に生活できていることは幸運以外のなにものでもないように感じられることがある。そのような平穏な生活感覚を破砕したのが東日本大震災である。地震や津波で一瞬のうちに家族も生活も一切合切奪われてしま

った多くの人々の無念を思うと、語る言葉が見つからない。

この大震災のあと、現地に駆けつけた学生たちのボランティア活動が始まり、昨年はその活動が2年目に入り、本学の学生たちはボランティアセンターを中心に3つの地域に分かれて活動をおこなってきた。ボランティアセンターにかかわらずに活動した学生もいたことであろう。いずれにしても、継続した活動は現地の人々に勇気を与え、活動した学生たちも多くのことを学んだにちがいない。その一方で、学生たちのなかにある種の葛藤、悩み、迷いが生まれてきたようである。熱心に深く活動した学生ほど葛藤や悩みは大きいと思われる。ゲーテが『ファウスト』のなかで言わせた言葉、人間は努力するかぎり迷うものである、という有名な言葉は、いつの時代にもあてはまる普遍性があるのであろう。生きて努力するということは、葛藤や悩み、迷いをつねに抱え込み、それを克服しようとしてまた努力する、ということを繰り返すことであり、悩みは尽きないのだ。しかし、だからこそ人間だとも言える。

ボランティア活動と学業との関係については大学が努力しなければならない分野である。社会的活動と学業のかかわりがきちんと整理でき、両者の相乗効果が認められるような教学制度をつくらなければならないと思っている。

### 3. ボランティア活動と人格教育

人格教育という言葉の意味が長いあいだわからなかった。いったい人格というものは教育によってつくられるものなのか、あるいは、そもそも人格という言葉はどのように定義されるのか。ところが、大学の広告を出すためにある新聞社のインタビューを受けているとき、突如この人格教育とはなにかわかったような気がした。人為的に人格を形成する教育を施すことができるか、私には疑問である。もしかしたら人格は意識しないところで形成されるのではないか。人間が社会的生き物である以上、人間の人格は社会的なかわりのなかで形成されると言えるだろう。だとすれば、ボランティアに限ったことではないが、たとえばボランティア活動は、社会のなかで、さまざまな年代の人々とかわるなかでおこなわれると考えると、この活動そのものが知らず知らずのうちに人格形成を促していると言えるだろう。ボランティア活動をおこなっている学生たちと接し、彼らと言葉を交わしていると、人間として成長しているという手応えを感じるし、実際そうなのだろうと思う。

あとは、本学特有のキリスト教による人格教育とボランティアをどのように結びつけるかである。その結節点が Do for Others なのだ。自分がして欲しいと思うことを他者のためにおこなう、という精神。さらにその前段から言えば、「求めなさい、そうすれば与えられる」という積極的な生き方。この精神や生き方がボランティア活動と結びついたとき、キリスト教による人格教育の具体的なあり方のひとつが具現するのであろう。人間を成長させる力、それがまさにボランティア活動なのだ。ボランティアセンターが明治学院大学を代表する顔のひとつであることは、まぎれもない事実なのである。

## センター長挨拶

ボランティアセンター長 原田勝広

明治学院大学ボランティアセンターは今大きく変わろうとしています。誕生したのは1998年、阪神・淡路大震災で現地に支援に行ったことが契機となりました。その後、白金・横浜両キャンパスの周辺での地域活動で活発な活動を展開してきました。地域の方からの評価も高く、大きな実績をあげてきました。この地域活動の重要性は少しも変わっておらず、ボランティアセンターの活動の1本目の柱として大きな比重を占めています。

しかし、時代の変遷とともにボランティアの意味や社会のニーズも大きく変化してきました。きっかけになったのは何といても2011年3月の東日本大震災です。明治学院大学は全国の大学に先駆けて、一番早く、4月には仙台で子どものケアを開始しました。これを含めて、震災支援を「Do for Smile @ 東日本」プロジェクトとしてまとめ、震災発生から現在まで継続的に支援を行っています。これが2本目の活動の柱で、現時点では岩手県大槌町吉里吉里地区、陸前高田、宮城県気仙沼の3か所で支援を続けています。

3本目の柱は、1 Day for Others です。2011年から始まった新しい試みで、1日、大学から街に出て、社会貢献を考えよう、実践しようというプログラムです。「ボランティア」「NPO、NGO、社会起業家」「企業CSR（企業の社会的責任）」の3つのコースが用意されており、学生の関心と興味によって、どこに参加するかは自由です。本年度は600人の学生が参加登録をしました。

4本目は海外ボランティアです。これは学生の関心が高すぎる分野ですが、経費が嵩むため、なかなか展開できていません。当面はNGOが行っている海外ボランティアのプログラムの紹介を行いながら、いずれはアジア、アフリカ、分野も単なるボランティアではなく、BOP（ベース・オブ・ザ・ピラミッド）ビジネスの現場を回ってみたいと構想を練っているところです。

この4本柱を統括し、調整するのが新設した学生事務局です。こうして全体で5本柱の組織を今年度、立ちあげることができました。ボランティアが活発な大学として知られる明治学院大学ですが、学生の包括的な参加を保障する新たな組織ができたことで、一層、よりよい活動につながるの間違いないと確信しています。今まで、学生の活動が白金・横浜というキャンパスにしばられてしまうという弊害がありました。これからは、キャンパスを超えて自由に活動できることになりました。ボランティアに対する考え方も、いわゆるボランティアから、NPO、NGO、社会起業家、企業CSRまで含めた「ボランティア活動」まで広げつつあります。この他大学にない明治学院大学独自のボランティアセンターが、教育の視点からも大きく貢献するのは間違いありません。

もちろん、基本はボランティア精神です。ボランティア精神は世界各地の利他主義と関係があります。ギリシャ語のアガペー、ラテン語のカリタス、ヴォルンタス、イスラム教のザカート、サダカ。さらに

仏教には、貧しいひとへの施しを意味する喜捨という言葉がありますし、儒教には、自己抑制と他者への思いやりを意味する仁という言葉があります。これらに源を発する利他主義をまとめてボランティア精神と呼んでよいと思います。

日本でも、奈良時代から行基、空海といった僧侶を通して、慈善活動、奉仕活動という名のボランティア活動が行われてきました。江戸時代には武士に対抗して力をつけた商人が大阪で、彼らの名前を冠した淀屋橋や道頓堀を作りました。欧米から日本にボランティアという言葉が入ってきたのは第二次世界大戦後のことですが、活動自体は日本に古くから存在したのです。

日本のボランティア活動は、阪神・淡路大震災を契機に大変活発になりました。1998年にはNPO法が施行され、アマチュアリズムの任意団体がNPO法人として組織化され、教育、福祉、街づくりなどの分野で、市民活動を担うようになっていきます。もちろん、市民活動のベースになっているのはボランティア精神であることは当然です。70年代に住民運動として、反政府、反企業の姿勢を強くしていた市民活動は、現在ではその対抗姿勢を転換し、政府、企業とパートナーシップを組んで協働する創造型に変わってきています。それを個人のベースで見えてみると、他者のために尽くすというよりは、自己実現のための新しい生き方としてボランティアをとらえている人が多い傾向にあります。

こうした中で起きたのが、東日本大震災とそれによって引き起こされた津波でした。この震災を通して、私たちは、もう一度、利他主義としてボランティアというものの原点を見つめなおすことができました。また、同時に、阪神・淡路大震災の時と比べ、他の多くのセクターが支援活動に参加している実態を知ることができました。つまり、自衛隊から始まり、国連機関、行政、企業、普段は海外で人道支援活動をしている国際協力NGO、地元のNPO団体が活動をしていました。

多くの学生がこの輪の中に入りましたが、明治学院大学の学生は「Do for Smile @ 東日本」プロジェクトで、それが可能になったのです。

ボランティア活動は大学だけのものでしょうか。決してそんなことはありません。一生続けられるものであるし、また、そうあるべきだと思います。本学の学生には、学生時代に培ったボランティア精神で自信を持って社会に出て行ってほしいし、Do for Othersを忘れずに社会に貢献してほしいと願っています。2013年、明治学院は創立150周年を迎えます。多くの卒業生が、社会のいろんな分野で活躍しています。ボランティアセンターでは、こうしたOB、OGと何らかの形で連携できないかと知恵を絞りました。その結果、1 Day for Othersのプログラムで協力していただけないかと考えています。つまり、先輩の会社や、関係するNPO、NGOに現役学生がお邪魔して、社会貢献を行うのです。先輩のご支援をいただければ、2013年に一斉に街に繰り出す学生数は1000名を超えるでしょう。大学をあげて社会のために何かをする。実現すれば、それは明治学院大学の、ひとつの価値になるでしょう。大きな財産です。そんな、新しい大学像を実は社会は求めているのです。そのために先頭に立つ。それがボランティアセンターの役割だと、私は考えています。皆で全力を尽くしましょう。